



大正・昭和の鳥瞰図絵師
連載—第①回
吉田初三郎の世界



湊鐵道

湊鐵道沿線名所図繪

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

江戸期以来の港津として発展した那珂湊と国鉄（現・JR東日本）常磐線との連絡線が計画され、湊鐵道が誕生した。連絡駅となる勝田駅が明治四十三年に新設。大正二年十二月二十五日には、その勝田と那珂湊間八kmが開業。さらに大正十三年に平磯、磯崎へ延伸。昭和三年に終点の阿字ヶ浦まで延伸して全通。総延長十四・三kmの短い地方民鉄となる。

この沿線を描く初三郎名所図絵作品は、大正十四年刊行だから、まだ途中の磯崎駅が終点だ。阿字ヶ浦付近の表記はないが、別荘地開発の様子や白砂青松の天女ヶ浜が、グラデーションで美しく表現されている。

遠く日立鉾山のお化け煙突まで健在だ。煙を吐く蒸気機関車が四輪連結の客車を牽引する沿線には、ピンクの桜が咲く磯前神社、津口神社境内や鐵道本社を立体絵図風に表現。

那珂川の対岸には、大洗の町並み

藤本一美
首都大学東京（都立大学）非常勤講師。日本国際地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。
近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に「旅と風景と地図の科学Ⅱ」（私家版2006年）、最新刊に「展望の山50選 関東編」（東京新聞出版局）がある。



『湊鉄道沿線名所図絵 [同]』

(大正 14 (1925) 年 5 月 15 日)

湊鉄道株式会社発行

大阪市内の初三郎経営・パーザイビュー社 印刷

東日本大震災被災から復興、 全線運行再開

明治 40 年に湊鉄道として設立、昭和 19 年に県内交通統合により茨城交通が発足。同社の湊線として営業していたが、平成 20 年 4 月に第三セクターのひたちなか海浜鉄道として新たなスタートを切った。沿線に広がるのどかな田園風景、国内でほとんど見られなくなった旧型ディーゼルカーが現役で活躍するなど「首都圏から 2 時間以内のレトロ体験スポット」として、観光地としても人気を集めている。東日本大震災では被災により全線運休。地域のみならず全国から支援の声が寄せられた。6 月下旬から一部区間を仮復旧、7 月 23 日には全線の運転を再開した。



ひたちなか海浜鉄道

Hitachinaka Seaside Railway Co.,Ltd.

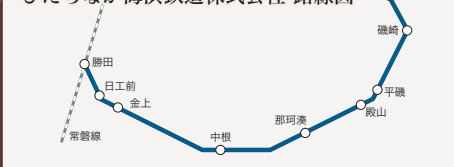
創業：明治 40 (1907) 年 11 月 18 日

開業：大正 2 (1913) 年 12 月 25 日

設立：平成 20 (2008) 年 4 月 1 日

本社：茨城県ひたちなか市釈迦町 22-2

ひたちなか海浜鉄道株式会社 路線図



と台地上の大洗神社を描き、男体山を主役とした日光連山よりも巨大な富士山とか、筑波山を中景に入れた大胆な構図も楽しいものだ。
遥か遠く、樺太や朝鮮、琉球、台湾まで図示する初三郎お得意のタツ子も見られる。

さて、その後の鉄道史にも言及すると、戦時の昭和十九年には、茨城県内の企業交通統合によって、水浜電車、茨城鉄道などと合併し、茨城交通湊線となる。一時は、国鉄線直通海水浴列車まで運行されたほど盛興となる。

しかし近年は、輸送実績は年間七十万人台に落ち込み、経営難に。ついには平成二十年四月一日、第三セクター（ひたちなか市、茨城交通出資）で存続決定となる。

そして、ひたちなか海浜鉄道として再出発して数年の矢先の今春、三月十一日の東日本大震災で大打撃を被ったばかりだが、復興・再々生を期待しているところである。

最後に、初三郎自身の「絵に添えて一筆」に拾ってみたい。「その美到底三保の松原も遠く及ばず、予はたゞ恍惚無我即ちこゝに『天女ヶ濱』と命名したのであった。(中略) この比類なき風光美」とあるが、今は開発で変貌を遂げている。